

SCHEDULE

2015 展覧会スケジュール

西中千人展

- 2月11日-17日 鹿児島山形屋 美術画廊
- 4月16日-22日 松江一畑百貨店 美術サロン
- 6月17日-23日 日本橋高島屋 美術画廊
- 7月 1日- 7日 米子高島屋 美術サロン
- 9月23日-29日 高知大丸 美術画廊

アートフェア

- 5月8日-11日 COLLECT (London)

NISHINAKA

西中千人通信

2015 早春



NISHINAKA YUKITO Glass Studio

〒299-4104 千葉県茂原市南吉田2967 TEL: 0475-34-7850

<http://nishinaka.com> e-mail: ichiban@nishinaka.com

YUKITO

ご挨拶

ヒビに美を見出した先人の美意識から生まれた「ガラスの呼継」。自身が創出した美に共感していただけることは、この上ない喜びです。

茶の湯の世界では、大徳寺「古田織部 400 年遠忌追善茶会」にて「呼継 盃 織部」をお使いいただき、また、都内の茶室へ設置される手水鉢の制作も進んでいます。

今年4回目の出展となるロンドンで開催のアートフェアでは、FEATURING ARTIST に選定されています。

作品展示とレクチャーを通して「ガラスの呼継」の世界観を発信してまいります。

春からは、常時、作品をご覧いただけるスペースも展開されます。

見る人が心を掘り下げることができる作品、ただキレイな置物にとどまらない真のアートを今年もチカラの限り追求します。

西中千人



別世界へと誘う光の道しるべ
ガラスの飛び石

沢山のお客様から驚きの声をいただいた。「このキラキラ輝くガラスの上を歩いてもいいの?」「空間に溶け込んで、初めからここにあったみたい!」石が当たり前だった飛び石をガラスに置き換えることは、今までの常識を破ること。しかし、伝統の和の美意識を礎にした新しいガラスアートの表現は、どなたの心にも、すーっと馴染んだようだ。



ガラスアート インスタレーション in 日本庭園

特別展 西中千人ガラス展 ~伝統を呼び未来を継ぐ~

3月15日-5月11日 古川美術館 分館 為三郎記念館

もうひとつの試みが、数寄屋建築を現代の感性で解釈するインスタレーション作品。暗くて狭い階段を下りた先にある 4 畳半に、極彩色の命の花が咲き乱れる「夢で見た花」。3 畳に満たない空間に高さ 1m を超えるガラス彫刻を配し、絶海の孤島に立つ観世音菩薩の慈愛を表現した「補陀落」ともに、和室から畳を取払い、砂利を撒いてガラス作品を設置した。数寄屋建築の室内空間だからこそ、しっとり全身が包まれるような空気感を伝えたいと考えた。また、ガラスの茶道具を合わせた茶室の床には、1200°Cに熔けたガラスで和紙に書いた「別無工夫」の軸で日本庭園のコンセプトを確立した夢想国師へのリスペクトを込めた。何事にも囚われず自由な観点で伝統の美意識を現代に解き放った。



館長の古川爲之氏から、展覧会のお誘いをいただきました。数寄屋建築と日本庭園の中で、ガラスアート作品をご覧いただくというものです。最初に思い描いたのは、ガラス(=光)という要素を取り入れた日本庭園。刻一刻と変化する陽に照らされて、光や水のように感じられるガラスに導かれ庭を散策し自然を体感する。日本庭園の飛び石にガラスを組み込むことで、滝の音や木々の匂い、苔の色までもが新鮮に感じられる。それはまさしく、茶碗のヒビ割れに金を埋め込むことによって、肌合いだけでなく全体のフォルムまでも、より鮮やかに浮かび上がらせる『継ぎの美学』すなわち『不完全の美』と同じ概念だ。



Special Event
いけばな小原流家元が
西中千人の器にいける
4月14日

個展開催中の為三郎記念館で、スペシャルイベントを開催。いけばな小原流家元 小原宏貴氏が、私の作品 3 点に花をいけ、対談をするというものだ。ヒビに美を見出した『金継』。誰かが初めたこの技法が、数百年を経た今、皆が知る伝統となっている。枯れた向日葵で夏の太陽や空、そして生命を表現する小原氏の作品。「日本の美意識」、「不完全の美」というキーワードで対談は盛り上がった。

Special Collaborate
よびつぎ
「呼継」&「時織」
ときおり
西中千人×荒井沙羅

荒井沙羅さんの「時織」は、生きてきた時間、即ち、個人的な思い出や記憶まで織り込んだ作品だという。私の呼継は、「今の自分を壊し、生まれ変わるのか」という問いかけの意味も含め、過去を礎に、未来へ向けて新たなものを生み出す『挑む表現』。沙羅さんの時織から触発された呼継と、沙羅さんが私の呼継からイメージした時織。お互いの作品が、さらに心地よい刺激を与え合った。

写真集『光のように水のように』



ガラス茶碗 at 大徳寺茶会

6月21日 | 京都大徳寺

昨夏、京都大徳寺で、古田織部 400 年遠忌追善茶会が行われた。林屋晴三先生が席主を務められた黄梅院の薄茶席で、「硝子呼継盃織部」をお使いいただいた。

林屋先生から、この茶会のために、織部のイメージで呼継盃を作ってみなさいと課題をいただいていたのだった。現代作家の様々な道具とともに、大徳寺の茶会でお使いいただいたことは何とも嬉しいものだ。硝子の茶具といえば、なかなか正式に使われる機会が無いと考えられているが、1726年に近衛家熙が「びいどろの菓子器」を大徳寺の茶会で使ったという記録がある。

大徳寺の中でも黄梅院は、普段公開されない塔頭で、今回の希少な機会に硝子の茶具が使われたことは、私にとって特別な想いがあり、名誉なこと。

自由奔放な織部が、もっとも自分のスタイルをやりなさいと、背中を押してくれた気がする。

守り神 —15mの大蛇—

グルグルと動き出しそうな生命を、やわらかいガラスで表現した。「作家の感性で、自由に白蛇を表現してほしい。」とのご依頼だったので、楽しみながら制作し、思い通りに作らせていただいた。仕上がりには、我ながら満足している。個人邸の広大な庭のに建てられる「かまど」の屋根の梁に設置されると、どんな様相になるのか、今から楽しみだ。



アートフェア COLLECT

5月9日-12日

LONDON, SAATCHI GALLERY

ロンドン、サーチギャラリー。世界中のトップギャラリーが集まるアートフェアには、ヨーロッパはもちろん、中東からも沢山の美術工芸ファンがいらしてくださる。その中で今年も、出品した「ガラスの呼継」が好評を博した。『本来欠点であるはずの「ヒビ」に美を見出し、愛でる』という日本特有の美意識を礎にした作品の背景をお話すると、驚くほどすなりと共感してくださる。一昨年から呼継をご覧いただいているお客様にも、今年作品に、新たな魅力を感じていただけたようだ。



EXHIBITION

GOLD展

7月7日-8月26日

在ロンドン日本大使館

金をテーマに、日本の伝統的な装飾と現代アートを紹介する「GOLD」展に、西中千人「ガラスの呼継」が展示された。伝統的な金継ぎの技術にインスパイアされた、現代アートの驚嘆すべき作品として紹介された。



金 GOLD GOLD: ALL THAT GLISTERS JAPANESE GOLD DECORATION
EMBASSY OF JAPAN - 7 JULY - 26 AUGUST 2014

PERSONAL INVITATION

The Embassy of Japan requests the pleasure of your company at the private view of

GOLD - JAPANESE GOLD DECORATION -
with presentations by
HOSONO Hitomi, award-winning ceramicist
Timothy TOOMEY, designer and coordinator of the recent UK Kintsugi Project
followed by a reception

GOLD: ALL THAT GLISTERS - JAPANESE GOLD DECORATION is an exhibition that brings together examples of the art of gold decoration in Japan. It contains works that continue age-old traditions requiring immense skill and exciting contemporary pieces which look to the past for inspiration.

Gold and porcelain have long been combined: KUTANI ceramics from Ishikawa Prefecture are well known, since the Edo Period, for their elegant decoration. These skills can be seen in the works from the KINZANGAMA workshop and KUTANILUKU takes these traditions in a new direction with playful humour. London-based Japanese artist HOSONO Hitomi applied gold leaf to delicate and elaborately sculptured porcelain. There is stunning lacquer work from master craftsman MATSUDA Shokan and examples of the art of KINTSUGI, where broken pieces of ceramics are repaired with lacquer and gold. Glass artist, NISHINAKA Yukito brings this idea into his latest work.

on Monday, 14 July 2014
6.30 pm
(Presentations: 6.30 - 7.15 pm; Reception until 6.30 pm)
at the Embassy of Japan,
101/104 Piccadilly, London W1J 7JZ



ALASKA



地球の鼓動を感じる大自然の懐へ—アラスカへの旅
水河に削られた岩肌に苔が生え、土となり、草木が茂り、花が咲く。植物が発する生命の匂いに包まれて、長い年月をかけた地球のライフサイクルを体感する。ここに居ると何ものにもとられず、勝手に気持ち解放されていく。

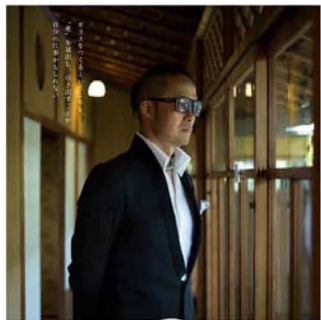


アラスカの自然は、有無を言わさない莫大な生命力で、私自身が作ったつまらない思い込みや先入感を洗い流してくれる。雄大な自然に包まれる安心感や地球との一体感、ヒトが自然からいただく力。この感覚を魂に刻み、これからは流されることなく、日々新たに生きていきたい。

VALUES

2014 SUMMER

ダイナースクラブ プレミアム会員誌「VALUES」
2014 SUMMER—
Q+A ガラス作家への 6
の質問—to掲載される。



Q
西中千人



Q1 西中先生、お久しぶりです。今回の「VALUES」では、ガラス作家としての活動についてお話を伺いました。まず、今回の特集は「ガラス作家への6つの質問」です。この質問は、ダイナースクラブのメンバーから寄せられたもので、非常に興味深い質問が多く、私も楽しみにしていました。先生は、今回の質問に対して、非常に丁寧な回答をしてくださりました。特に、ガラス作家としての活動について、先生はどのような考えをお持ちなのか、という質問には、先生自身の経験や思い入れを交えて、とても詳しくお答えくださいました。先生は、今回の質問に対して、非常に丁寧な回答をしてくださりました。特に、ガラス作家としての活動について、先生はどのような考えをお持ちなのか、という質問には、先生自身の経験や思い入れを交えて、とても詳しくお答えくださいました。

TALK

特別対談『ヒビの美を見出す

—桃山の茶陶～現代のガラス—

砂澤祐子氏 × 西中千人
(五島美術館主任学芸員)

柿傳ギャラリー(東京新宿)
個展「西中千人 ガラスの世界」会期内に開催
11月29日(土)–12月7日(日)

新宿のビルの地下に『ガラスの日本庭園』を出展させた個展会期中、砂澤祐子氏との特別対談が開催された。日本の茶陶における呼継から、西中呼継に至るまで熱い語り合いが展開された。(対談再録は別紙)



PUBLICITY



Wired.jp

CREATIVE HACK AWARD 2013
グラフィック賞受賞記事が、Wired.jp
に掲載される。
「ヒビ割れに宿る日本の美意識を、あえてガラスで表現する男」というタイトルで、賞のテーマ(既成概念を壊し前へと進む野心とビジョン)と作品および活動との関係性を紹介された。

LECTURE

『重森千青と学ぶ日本庭園の魅力』 重森千青氏 (作家)

4月20日
古川美術館 分館 為三郎記念館



作庭家重森千青先生に『巨石—作庭記—夢窓疎石—重森三玲—これからの庭』というテーマでお話をうかがった。先生の祖父、重森三玲氏は、大胆な石組みなどそれまでにない庭を作られ、昭和のアバンギャルド、日本庭園の革新者として著名である。先生からは、「実物を見てみると、あまりにも周囲に溶け込んでいて違和感が無く、逆に驚いた」「ガラスでありながら自然の石のような風情がある」「醍醐寺、三宝院庭園の石英質が析出した藤戸石とオーバーラップした」というお言葉をいただいた。私の新しいチャレンジを、「伝統を踏まえた上での次なる一歩」という言葉で評価してくださった事は、挑み続ける私にとって最上のエールとなった。